

日本の伝統音楽と西洋の音楽の比較に基づいた 鑑賞授業の研究

所属コース 教科領域コース
氏名 古和田美友
指導教員 市川克明 井上洋一

【概要】

本研究では、日本の伝統音楽である歌舞伎と西洋の音楽であるオペラ（楽劇を含む）を比較鑑賞し、幅広く柔軟な見方・考え方を持つ生徒を育成するための授業実践を行った。自国の伝統文化に関して理解を深め、他国の芸術を尊重する態度を身に付けさせるための効果的な指導の在り方について研究を行った。

歌舞伎とオペラから4作品を教材として選定し、授業の中で比較しながら鑑賞した。「愛と死」という共通のテーマを持つ作品から、同様の場面を鑑賞することとした。この実践により歌舞伎とオペラの共通点や相違点の発見を通して、総合芸術への興味・関心を高めたり、特徴や歴史、作品の内容の理解を深めたりするということが分かった。また、今回の実践から、カリキュラム・マネジメントや体験的な音楽鑑賞という視点からのさらなる授業展開の可能性を見出すことができた。

キーワード 鑑賞 歌舞伎 オペラ 日本文化 伝統音楽 西洋芸術

1. 研究の動機・目的

1-1 問題の所在

令和4年度から全面実施となる高等学校学習指導要領について、改訂のポイントの中に、「伝統や文化に関する教育の充実」という項目が設けられている。特に、芸術（音楽）においては、伝統音楽の歴史や文化に関する学習の充実が求められている。音楽科は、様々な教材（楽曲）を通して、日本国内外の文化や歴史にふれる機会の多い科目でありながら、これまでの授業では、日本の伝統音楽について理解を深める学習は十分ではなかったのではないかと感じた。

1-2 研究の目的

近年、異文化理解や多文化共生ということが重要視されているが、音楽科において、これらを具現化するための効果的な教材開発・指導法が望まれている。

本研究は、学習指導要領で示された幅広く柔軟な見方・考え方を持つ生徒を育成することを目的とする。鑑賞領域の授業実践を通して、自国の伝統文化に関して理解を深めるとともに、他国の芸術を尊重する態度を身に付けるための教材や指導の在り方について研究する。

2. 研究の方法

日本の代表的な伝統芸能である「歌舞伎」と、同時代に西洋で起こり、発展した「オペラ」を題材に、比較鑑賞を行う。

2-1 教材について

○歌舞伎とオペラ

授業実践を行う前に、歌舞伎とオペラについて歴史と特徴をまとめ、それぞれの共通点や相違点に着目して比較鑑賞の対象とした。

○演目の選定とテーマ

日本の伝統音楽である歌舞伎 1 作品を軸に、言語の異なる 3 つのオペラ作品を用いて授業実践を行った。選定した 4 つの作品は、どれもテーマが共通している。男女の恋愛、心中、報われぬ恋といった内容であり、「愛と死」を取り扱う作品である。なお、オペラ 3 作品は中期ロマン派の同時代に成立している。

歌舞伎「曾根崎心中」

近松門左衛門（1653-1725）による世話物の作品の一つ。1703 年に人形浄瑠璃として成立し、1719 年に歌舞伎の演目として初演される。実際に発生した心中事件を題材に脚色し、当時絶大な人気を誇った。

オペラ「アイダ」(イタリア語)

イタリアを代表する作曲家、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）によって作曲された。1871 年に初演を迎え、全四幕からなる作品である。ファラオ時代のエジプトとエチオピア、2 つの国に引き裂かれた男女の悲恋を描いた作品。

楽劇「トリスタンとイゾルデ」(ドイツ語)

19 世紀に活躍したドイツの作曲家、リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）により創作・作曲された。1865 年ミュンヘンにて初演された、全三幕からなる作品である。伝説上の中世イングランドを舞台に、アイルランド王女のイゾルデとコーンウォール王の甥であるトリスタンの悲恋を描いた物語。

オペラ「ロメオとジュリエット」(フランス語)

フランスの作曲家であるシャルル・グノー（1818-1893）によって作曲された。1867 年に初演され、原作はシェイクスピア作品の「ロメオとジュリエット」である。14 世紀のイタリアを舞台に対立する 2 つの家の男女の報われぬ恋を題材としている。

2-2 効果的な指導法について

全二時間構成の 1 単元として扱い、1 時間目に「曾根崎心中」と「アイダ」を、2 時間目に「トリスタンとイゾルデ」、「ロメオとジュリエット」を鑑賞させた。2 時間を通して、歌舞伎とオペラの共通点や相違点についてまとめながら、個々の作品の特徴などを学習させるとともに、それらの魅力に気付かせ、作品が人々や社会に与える影響についても考えを深めさせた。

○効果的な指導のための工夫

歌舞伎、オペラの4作品について、映像資料を準備した。オペラ3作品については、外国語で演じられているということもあり、動画編集ソフトを使用して授業者が作成した日本語訳の字幕をオーバーレイ表示した。また、歌舞伎、オペラの4作品の鑑賞部分の歌詞、日本語訳、現代語訳を資料にまとめ、配布した。

さらに、作品の概要を説明したり、生徒からの意見をまとめたりする際には、プレゼンテーションソフトを使用して、視覚的に理解しやすいよう工夫に努めた。

○ワークシートの使用

2枚のワークシートを使用した。ワークシート作成の際には、生徒それぞれの考えや感想を記入できるよう、十分なスペースが確保できるよう留意した。2時間目のワークシートには、生徒自身に比較項目を設定させ、共通点や相違点をまとめる表を作成させた。

3. 結果

3-1 授業実践

○展開

<第1時>

まずオペラや歌舞伎について生徒たちが中学校段階までに身に付けた知識を整理し、それらを共有した。「曽根崎心中」と「アイダ」から抜粋した場面を鑑賞させ、鑑賞した場面がどのような場面だったのか、鑑賞して感じたことをワークシートにまとめさせた。その後、2作品について概要やあらすじを学習し、作品の内容を理解したうえで共通点や相違点に着目しながら再度鑑賞させた。

<第2時>

第1時のワークシートの記述から、振り返りを行った。本時では、「ロメオとジュリエット」、「トリスタンとイゾルデ」から抜粋した場面を鑑賞させた。鑑賞前には、作品についての資料(概要・あらすじ・対訳等)を配布した。第1時の2作品と合わせて、生徒から出された項目の内容を分類しながらワークシートにまとめさせ、生徒同士で話し合う時間を設け、意見を共有し考えを深められるよう努めた。

歌舞伎、オペラは、文化的、社会的、歴史的背景の異なる芸術作品であるが、いずれも、テキスト、音楽、舞台演技など、全てが有機的に結びついた総合芸術であると位置づけられる。授業を通じ、総合芸術としてのこれらの作品を単なる鑑賞教材ではなく、芸術的価値や社会生活との関わりを考えさせ、より深く掘り下げる学習活動を行った。

○自評

2時間を通じて、歌舞伎とオペラに触れる時間を多く作ることができたが、歌舞伎もオペラも長大な作品なだけに、一つ一つの作品をじっくりと鑑賞させるには、時間が足りなかった。しかし、映像資料に字幕を挿入したり、プレゼンテーションソフトを活用したり、生徒の理解を深めさせる工夫により効率的な学習ができた。授業では、教師から説明する場面や、授業内における鑑賞教材の占める部分も多く、生徒の主体的な活動の時間をさらに充実させられると良かったと思われる。生徒の活動を増やし、主体的に学ばせるための授業展開の在り方について考えさせられた。

○参観者からの助言

<授業展開について>

鑑賞授業ということで、作品の鑑賞に充てる時間と議論する時間とのバランスを見直すべきという指摘を受けた。抜粋した場面が 4～10 分程度のものであったため、作品について議論したり、考えをまとめたりする時間が少なく、鑑賞することに対して重きを置きすぎていた。鑑賞する作品を 4 作品ではなく、2 作品または 3 作品にすることでより一つ一つの作品について深められたのではないか。

<教材教具について>

今回教材として扱った 4 作品はテーマを統一し、議論し考えを深めるにはよかった。映像資料を利用していたが、音楽という教科の特性上、さらに音質の良いものを選ぶべきである。音質を上げることによって、生徒たちはその音楽に没頭することができ、感性に訴えかける鑑賞授業になるのではないか。響きに包まれるような音素材を見つけることが重要である。また、たくさんの作品を用いてたっぷり聴かせるのか、作品数を絞って一つ一つをじっくり聴かせるのかという視点で作品選びをすることも必要であり、生徒の実態を把握し、それに即した指導を心掛けることが望まれる。

<題材のテーマについて>

今回選んだ作品は「愛と死」というテーマが共通しており、まとめ方が非常に難しいものだった。悲劇を鑑賞する際には、「死」というものにクローズアップするのではなく、死というものがタブーであるからこそ、なぜ人々は悲劇を求め観ていたのかということや、愛を貫くためには死しかなかったのだろうかなど、作品の内容を絡めながらより深い議論につなげられればよかったのではないか。また、愛と死というテーマにとどまらず、音楽の本質であるハーモニーなどに気づかせられるような展開にする方法も考えられた。生徒に主体的に考えさせることを心掛け、授業者側は何を教えるかではなく、いかに教えないか(教えることを絞るのか)という逆転の発想も必要である。

3-2 生徒の反応

授業時に使用したワークシートの記述から、本單元における生徒の反応を分析した。2 時間の授業を通して、歌舞伎とオペラを比較鑑賞した結果どのように感じたか、イメージを持ったかということについて自由記述させたものから、ワードクラウドを用いて分析した。(次頁図)

生徒たちの記述からは、鑑賞する前はオペラや歌舞伎は長大な作品が多く堅苦しいものであるというイメージを持っていた生徒が多かった。一方で、比較鑑賞を通して、作品の内容やそれぞれの共通点や相違点を発見することで理解が深まり、親しみやすいものであるということに気付けたという記述が複数見られた。また、それぞれの特徴をよく理解でき、総合芸術としてのオペラと歌舞伎のつながりを感じられたということや、他の作品も鑑賞してみたいなどオペラや歌舞伎に対する興味が深まったという記述も目立った。加えて、本単元の作品のテーマである「愛と死」に関するキーワードがあまり見られなかったことから、作品の内容自体に着目して鑑賞させ、テーマの共通性にまで気付かせられるような指導には至らなかったと考えられる。



図：ユーザーローカル テキストマイニングツール（<https://textmining.userlocal.jp/>）による分析

4. 今後の展望・まとめ

今回、4作品を選定し教材として利用した。それらの共通するテーマが「愛と死」というものであり、授業実践を終えて「死」というものの扱い方について実習校の指導教員により問題提起された。「曾根崎心中」が当時の人々に与えた影響も大きく上演中止になったことがあるということもあり、芸術のもたらす人々への影響や、作品の舞台となった場所が現在も残されていることも含めてまとめとした。しかし、昨今、事故や事件などのニュースで「死」に対して敏感になっている生徒がいるということも分かった。そのような実態の中で「死」という言葉にフォーカスするのではなく、作品の音楽自体や、人々が芸術を求める理由など、作品そのものに着目した発問・議論も可能であると考えた。

また、オペラや歌舞伎は総合芸術の一つであり、文学や美術、史実や社会情勢などとも深い関係が見られる。よって、他教科や道徳的な内容との関連もあり教科横断的な学習にも発展させられる可能性は大きい。ひいては、カリキュラム・マネジメントの一環として今回の単元が活用できるかもしれない。さらに、今回は鑑賞と議論にとどまったが、原作となっている文学作品や演劇・バレエなど、他の総合芸術について調べ学習をさせたり、実際に鑑賞した部分を演奏してみたり、生徒たちが音楽を聴くだけでなく発信できる体験的な活動を組み込み、ダイナミックな教材開発と授業展開について研究を続けたい。

参考文献・資料

- ・藤野義雄(1968). 曾根崎心中 解釈と研究 桜楓社.
- ・鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之(1998). 新編日本古典文学全集 近松門左衛門集② 小学館.
- ・岡部博司(1988). 名曲オペラボックス7 ワーグナー トリスタンとイゾルデ 音楽之友社.
- ・浅香淳(1988). 名曲オペラボックス13 ヴェルディ アイーダ 音楽之友社.

- ・分かる！オペラ情報館 ロメオとジュリエット
<https://opera-synopsis.sakura.ne.jp/romeoetjuliette.html>
(最終アクセス日 2022 年 1 月 9 日)
- ・Kabuki on the web 歌舞伎演目案内 曾根崎心中 <https://www.kabuki.ne.jp/>
(最終アクセス日 2022 年 1 月 9 日)
- ・文化デジタルライブラリー <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>
(最終アクセス日 2022 年 1 月 9 日)

謝辞

本研究を進めるにあたり、丁寧に御指導いただいた愛媛大学の市川克明先生、井上洋一先生に深く感謝申し上げます。また、研究に快くご協力いただいた連携実習校の先生方や生徒の皆さんに心より感謝し、御礼申し上げます。